The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	真理の理論はTruthmaker理論にどんな影響を与えるのか
Author(s)	原田, 淳平
Citation	メタフュシカ. 2011, 42, p. 79-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23315
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

真理の理論は Truthmaker 理論にどんな影響を与えるのか

原田淳平

序

文や命題や言明などの真理の担い手（truthbearer）が真であるとき、それを真にする何かが存在するという考えはごく常識的なものである。現代の分析形而上学ではこの「真にするもの」は truthmaker（以下 TM と表記する）と呼ばれ、TM に関する一連の議論は TM 理論と称される分析形而上学における一つの巨大な分野を形成している。同じように真理を取り扱う理論には真理の理論（theory of truth）がある。真理の理論とは文字通り真とは何かを解明する理論であるが、多くの著作で真理の理論と TM 理論は混同されている。だがこの混同は誤解に基づいており、これを解消するためには TM 理論と真理の理論がどのような関係にあるのかを明らかにする必要がある。

本稿の目的は、TM 理論と真理の理論の関係について次の三点を主張することである。

1. TM 理論は真理の理論ではない。
2. 真理の理論に基づいた TM 理論は、どんなものであれ、「真理は実在のうちに基盤を持つ」というテーゼを維持することと、否定存在命題（negative existential proposition）や分析命題を適切に扱うことを両立させることはできない。
3. もし TM 理論を受け入れるならば、真理の多元主義（alethic pluralism）による TM 理論を採用することが最善の選択である。

本稿の具体的な構成としては、1 章で TM 理論の主張と現在 TM 理論が抱えている問題を説明する。2 章では古典的な真理の理論の主張と真理の多元主義を簡単に説明する。3 章では TM 理論は常に何らかの真理の理論を前提しているゆえに、真理の理論にはなりえないことを示す（1 の証明）。4 章では各真理の理論が TM 理論に与える影響を個別に検討し、すべての問題が解決するような真理の理論は存在しないことを明らかにする（2 の証明）。最後に 5 章では 4 の分析結果と意味論との調和という観点から、真理の多元主義に基づいた TM 理論が最も可能性があることを示す（3 の証明）。

1. TM 理論とは何か

1.1 TM 原理、TM 関係、TM 全面主義

TM に関する議論は、大きく分けて TM の存在論的身分の考察と TM 関係の分析の二つで構成されている。TM の存在論的身分の考察とは、そのまま TM の具体的な内容を論じる議論である。現在の議論では、主に TM は事実や事態ないしトロープ（trope）だと考えられている。[1]例えば TM を事実や事態だとする論者によれば、ある命題「雪は白い」に対する TM は「雪が白いこと（snow's being white）」である。TM をトロープだと解する論者によれば、この命題の TM は「雪に属する白いトロープの存在」という具合である。TM と対をなす真理の担い手については論じられることは稀であり、多くの場合 TM によって真にされるものという文脈で簡単に触れられるだけである。参考までに真理の担い手の候補を列挙しておくと、文や命題、信念や言明などが代表的である。TM の存在論的身分を問うことは興味深いトピックだが、本稿で主題としたいのは TM 関係の分析なので、TM の存在論的身分を考察することは別の機会に譲ることにする。本節以下では TM 関係を分析する際に用いられる用語を一通り概観し、TM 理論とはどのような理論かを説明したい。

さて、上で TM 論者には TM や真理の担い手に関していくつかの選択肢があることを述べたが、通常 TM 論者はたとえこれらについて異なる見解を持っているにしても、「真理は実在（reality）のうちに基盤を持つ」というテーゼを共有している。[2]このテーゼはしばしば次のような「TM 原理（truthmaker principle）」として表される。

> TM 原理：*p*（命題）が真であるのは、*p* が真であることを必然化するような E（世界にある存在者（entity））が存在するときその時に限る。[3]

この TM 原理はアームストロングによって定式化されたものだが、これを理解するためには引用内の「必然化」についての説明が必要だろう。「必然化」とは、E が存在するすべての可能世界において、E は *p* を真にするということを意味する。必然化が要求される理由は、TM 理論に従うと真であるときは必ず TM が存在するはずであり、それゆえ *p* が真であるならば、現に存在し、*p* を常に真にするような E が原理的に存在しなければならないからである。

すぐ上で TM 原理では E と *p* の間に「必然性」の関係が成立していると説明したが、この E と *p* の間に成立する関係は TM 関係（truthmaking relation）と呼ばれる。TM 関係は次のように表現することができる。

---

1 TM を事実や事態と考える代表的な論者はアームストロング（1997）や McGrath（2003）である。またトロープだと考える論者としては、キャメロン（2008）や Mulligan, Simons, and Smith（1984）が挙げられる。いずれも TM は世界の一部であり実在だとされる。

2 Cf., Rowe, 2010, p. 33.

3 Cf., Armstrong, 2004, p. 17. アームストロングは真理の担い手を命題だと考えているが、本稿ではこれが何であるべきかについては論じない。単に便宜上、真理の担い手を命題に統一する。

TM 関係：E が *p* に対する truthmaker であるのは、E が存在するとしたら *p* は真であるが必然的であるときその時に限る。[4]

TM 原理と TM 関係には重要な差異が存在する。TM 関係は、命題が真であることと *p* と E の間の TM 関係の成立を等置するのに対して、TM 原理は真であることと TM を所有することを等置している。TM 原理ではすべての真理が TM を所有することが主張されているのである。この「すべての真理は TM を持つ」という考えは、TM 全面主義（truthmaker maximalism、以下 TMM と表記する）と呼ばれる。

TMM：すべての真理は truthmaker を所有する。

ここまでで TM 理論で用いられる用語を一通り説明したが、一度これら相互の関係を明らかにすることを通じて、議論の整理を行いたい。まず明らかにしたいのは、TM 理論のテーゼと TM 原理の関係である。アームストロングは真であるとは TM を所有することであり、TM とは世界に存する実在だと考えている。[5]この考えのもとでは、TM 理論のテーゼと TM 原理は同一視される。しかしながら、この同一視は TM を世界の中の実在だとみなすときのみ可能であり、もし TM が非実在的なものであるとしたら、両者は区別されるべきである。それらを同一視しない場合、E は実在としては世界に存在しないので、純粋に *p* が真であることを必然化するという役割だけを担う。当然このような E を採用することは、「真理は実在のうちに基盤を持つ」というテーゼを放棄することを含意するので、この路線を行くと、TM 理論は TM 原理だけを採用することになる。

もう一点、蛇足だが TM 理論のテーゼと TM 原理および TMM の関係を補足しておこう。TM 原理を簡潔にパラフレーズしたものが TMM であり、両者の主張が食い違うことはない。対して、これらと TM 理論のテーゼは異なるものである。既に述べた通り、テーゼと原理を同一視しない眼目は、TM を非実在として考える可能性を考慮するためである。本稿ではこの可能性も選択肢として含めた上で、TM 理論の検討を行う。したがって、本稿が TM 理論だとみなすのは、理論の不可欠な要素として TM 関係と TM 原理および TMM を含むが、TM 理論のテーゼの充足は必ずしも含まない理論である。

---

4 この関係をどう考えるかについても現在係争中であり、実際 TM 関係を上のように必然的な関係と捉えない論者も少なからず存在する。例えば Schaffer によれば、TM が真理の担い手を基礎づけること（grounding）が TM 関係だとされる。Cf., Schaffer, 2010, pp. 309-310. 必然性以外の TM 関係が求められる主な理由は、否定存在命題や分析命題が引き起こす問題を解決するためである。だが、TM 関係を必然的関係としてみなすことが上のような問題を生じさせる原因になっているかどうかは明らかではない。

5 Cf., ibid, p. 5.

1.2　TM 理論の問題点

現在の TM 論者は、少数の例外を除いて TMM を何らかの形で制限している。[6]TMM を制限する理由は、多くの場合、否定存在命題や分析命題の処理に伴う問題に関係している。例えば、否定存在命題「ユニコーンは存在しない」や分析命題「四角形は四つの角を持つ」は何らかの世界に存在する実在によって真にされるわけではないように思われる。これが正しいとすると、こうした事例は TMM に対する重要な反例であり、この二つの命題は TM なしの真理だと言える。だがドッドによれば、TMM の拒否は TM 理論自体を放棄することに繋がりかねない決断である。[7]というのも TMM の拒否は、TM 原理の拒否と同義であり、TM 原理は TM 理論の主張を端的に表したものであるため、TM 原理を放棄しては TM 理論たりえないからである。この点に関して TM 論者は、苦心して TM 理論のテーゼと TMM を堅持し上の問題の解決に取り組むか、TMM を拒否して制限された領域にのみ適用可能な TM 理論を採用するかのどちらかを選択するように迫られる。これが現在の TM 論者が直面している問題である。[8]

この点に関して一つだけ述べておくと、この TM 論者の問題設定からも分かるように、TM 論者には命題が非実在的なものによって真にされるという考えはない。多くの TM 論者は TM 理論のテーゼを所与のものだと考え、テーゼを満たした上で採用可能な TM 原理の模索や、TM 原理を適用可能な命題の特定という課題に取り組んでいる。ここには TM 論者の形而上学的な実在論への傾倒が読み取れるが、TM 理論に TM 理論のテーゼを保持することを迫る合理的な理由があるかは疑問である。というのも、TM 論者は真であるときにはそれを真にするようなものが存在するという直観から出発するが、この考えだけからではその「真にするもの」が実在であることは導かれないからである。このように考えると、TM 理論の実際の問題は、TM 理論のテーゼを受容するか否かだということが理解できる。そして、実際には TM 理論のテーゼは TM 理論の外から持ち込まれたものであり、両者は元来独立した問題なのである。ここではこの問題にこれ以上踏み込むことはできないが、少なくとも TM を非実在として捉えることは TM 理論にとって決して非合法な考えではない。したがって、本稿では以下で TM が実在であるかどうかは抜きにして、TM 理論がどのような真理の理論を前提しうるかを論ずるが、この試み自体は決して TM 理論以外の何かを前提するよう強いるものではなく、純粋に TM 理論の可能な選択肢を考察するものである。

2. 真理の理論とは何か

2.1　伝統的な真理の理論

真理の理論は真とは何であるかを問うことを主題とする。真理の理論の最も有名なのは真理の

6　例えば、Simmons によれば総合命題にだけ TM が存在する。また、Mulligan, Simons, Smith は総合的な原子文に限定することを提案している。だが無論これらは「真理は実在のうちに基盤を持つ」というテーゼに違反しており、それゆえ TM 理論は総合的真理だけ通用するトリヴィアルな理論ということになる。Cf., Simmons, 2005, p. 254, and Mulligan Simons, and Smith, 1984, p. 289.

7　Cf., Dodd, 2007, pp. 383-384.

8　Ibid, p. 386.

対応説（correspondence theory of truth）だろう。この説によれば、真理は対応であると説明される。このような対応説は次のように一般化することができる。

対応説：*p* が真であるのは、*p* が p（事実や事態）と対応するときその時に限る。

通常真理の対応説は、*p* と p でカテゴリーとして異なる存在者を指示すると考えられている。具体的には、前者の候補は文、命題、言明や信念などであり、後者は事実や事態だとされる。だが真理概念の分析だけに着目するとき、*p* や p の具体的な例示はそれほど重要ではない。それらに何が該当するのであれ、とにかく真理の対応説は真理を対応関係として説明し、そこでは常に「真である（is true）」は「対応する（correspond to）」だとみなされる。

対応説以外に代表的なものは、真理の整合説（coherence theory of truth）や真理の代替説である。前者は真であることを信念体系全体との整合性によって説明する。対して、後者はプラグマティストによる合理的受容可能性（rational acceptability）を用いた理論であり、真であることをある認知的に理想的な条件のもとで正当化されることだとする。[9]両理論は次のように一般化することができる。

整合説：*p* が真であるのは、*p* が信念体系全体と整合するときその時に限る。
代替説：*p* が真であるのは、*p* がある十分良い理想的な認知条件のもとで正当化されるときその時に限る。

明らかに上の二つの理論は対応説と違い、カテゴリーとして異なる二つの存在者を要求しない。これは TM 論者にとって、対応説のように事実や事態といった形而上学的含意のある存在者を前提せずに真理概念を説明可能だという点でメリットになる。しかし「真理は実在のうちに基盤を持つ」というテーゼが示す世界との繋がりを不明瞭にする点でデメリットにもなるかもしれない。事実、TM 論者の多くはこのテーゼに基づいて真理概念を対応説で捉えているように思われる。[10]このように考えることの妥当性は、実際に真理の対応説を TM 理論に適用する四章で明らかにする。ここでは、真理概念を対応、整合、理想的な条件のもとでの正当化によって説明するのが、伝統的な真理の理論であるとだけ最後に述べておく。

2.2　真理の多元主義

真理の多元主義とは、文や命題が真になる仕方は一つより多いとする立場である。[11] この立場によれば、我々の言語には道徳的命題の領域や数学的命題の領域など様々な言説の領域が存在す

---

[9] Cf., Putnam, 1990, vii. および、Putnam, 1981, Ch.3.

[10] 例としてはアームストロングやキャメロン、Rodriguez-pereyra などが挙げられる。彼らの具体的な言及については 3.1. 及び注 13 を参照。

[11] 代表的な論者はライトやリンチである。Cf., Wright, 1992. see also Cf., Lynch, 2009.

る。それゆえ各言説の領域の差異に敏感であるならば、真理は言説の領域ごとに異なる仕方で扱われるべきなのである。[12]

このような理論が求められる主要な理由は、例えば一見真理値があるように見える道徳的命題には、それと対応すべき事実が見当たらないことである。整合説や真理の代替説にしても、ある命題が真であるかどうかは、現実の個人ないし共同体の信念体系や、実際に存在するかどうか分からない理想的な認知条件の存在に依存している。これらがどのような形で存在するのか、あるいはそもそも現実に存在するかどうかは偶然である。こうした偶然的に成立する基準では、命題の真理値の客観性を保証することはできない。

これに対して真理の多元主義では、ある命題が真理値を持つのは、それが真理値を持つとされる他の命題と同じ使用法を持つときである。真理値を持つ命題は、主に条件法の前件になることが可能であり、またその命題を否定することが可能だとされる。[13] 真理値の有無にこのような言語による基準を設けることは、どの古典的な真理論を採用するかとは独立して一般化可能であり、偶然的な要素を持たない基準である。それゆえ、真理値の有無に言語的な基準を持ち出すことには説得力がある。以上のように、真理の多元主義はある命題の真理値の有無を一定の言語的な基準を満たすか否かで決定する。その上で、その基準を満たす命題に対しては当の命題が属する言説の領域の特徴に合わせて、真理概念の説明を与える。[14] 例えば物的対象に関する命題の領域では対応説を用い、数学的命題の領域では整合説を用いるという具合である。やや駆け足になったが、次章では TM 理論が真理の理論になりえないことを示す。

3. TM 理論は真理の理論ではない

本節では TM 理論は真理の理論になりえないことを明らかにしたい。これを示す理由は二つある。第一に、TM 理論が既に真理の理論であるならば、どの真理の理論も TM 理論に影響を与えないので、TM 理論に各真理の理論を代入するという試みは完全に的外れだからである。第二に、極めて多くの TM 論者が TM 理論は真理の理論になりうると考えているからである。[15] 例えばアームストロングは「対応するもの（correspondent）と truthmaker は同じものである」[16] と述べ、他方でキャメロンは TM 理論とは「ある命題が真であることについての理論である」[17] だと主張する。だが、このように考えることは TM 関係の実質を見失っている。

TM 理論が真理の理論になりえないのは、TM 理論が既に真理を前提しているからである。実

---

12 Cf., Edwards, 2011, p. 28.

13 ライトによれば、真理述語であるための基準は以下を充足することである。主張するとは真であると示すことである。どんな真偽で評価される（truth-apt）内容も同様に真偽で評価される有意味な否定を持つ。真であるとは事実をありのままに述べることである。言明は真であることなしに正当化されるかもしれないし、その逆も成り立つ。Cf., Wright, p. 34.

14 最近の研究では真理の多元主義には複数のヴァージョンがあることが示されている。上の説明は主にライトの主張に基づいているが、リンチはある命題の真理値の有無に関してライトとは異なる基準を与えている。Cf., Lynch, 2009, Ch.1.

15 アームストロングやキャメロン以外にも Rodriguez-pereyra, 2006, p. 263. などがいる。

16 Armstrong, 1997, p. 128.

17 Cameron, 2008, p. 412.

際 TM 関係の後件「E が存在するとしたら *p* は真であるが必然的であるときその時に限る」の中には、既に「真である」という語が存在する。説明すべき概念が予め前提されているのでは真理の分析ないし定義にはなりえない。一見真理分析を行っているように見える TM 原理も右辺に真という語が説明されずに残っており、それゆえ TM 原理も真理定義にはなりえない。確かに TM 原理は真理定義に用いられる T 文「*s* が真であるのは、p であるときそのときに限る」と見かけ上類似している。だがこの類似性はあくまで表面的なものであって実質は伴っていない。結局 TM が何であるかを説明するときには TM 関係を説明しなければならず、当の TM 関係の説明に真理は既に前提されているのである。

以上のことより、TM 理論は真理の理論にはなりえない。TM 理論における TM 関係は真理概念を用いることで初めて理解可能になるとすると、TM 論者がどのような真理の理論を採用しているのか、あるいは採用しうるのかは十分検討する価値があるだろう。次章では、TM 理論が異なる真理の理論を採用することによってどのような影響を被るかを分析する。

4. 真理の理論が TM 理論に与える影響

4.1 真理の対応説に基づいた TM 理論

既に述べた通り、TM 理論が真理の理論を前提することは明らかである。それでは具体的に TM 理論がどんな真理の理論を前提しているのか、そして前提することによってどのような影響を受けるのかを明らかにしよう。本節では真理を対応だと捉えることが TM 理論へと与える影響を考察する。TM 関係と対応説とは次のものであった。

> TM 関係：E が *p* に対する truthmaker であるのは、E が存在するとしたら *p* は真であるが必然的であるときその時に限る。
> 対応説：*p* が真であるのは、*p* が p と対応するときその時に限る。

対応説による真理分析の後件「*p* が p と対応する」を、TM 関係の後件内の「P は真である」に代入すると次の式が得られる。

> TM 関係（1）：E が *p* に対する truthmaker であるのは、E が存在するとしたら *p* は p と対応するが必然的であるときその時に限る。

TM 関係（1）における E は *p* と p の対応を導出するものとなっている。仮に E と p が同一であるならば、TM 関係（1）は「E が *p* に対する truthmaker であるのは、E が存在するすべての可能世界で E と *p* の対応が成立するときその時に限る」となる。TM 関係（1）のような TM 関係の理解には取り立てて問題はない。このとき TM 関係（1）がもし TMM を受容するならば、真なる命題には常に命題と TM の対応関係が成立していることになる。だが TMM の受容は次のジレンマを引き起こす。一方で否定存在命題も対応すべき何らかの実在が存在すると想定すると、

＜ユニコーンが存在しないこと＞といった否定の事実や事態の存在を認めざるをえなくなる。他方でこれを例外として取り除くとしたら、結果として TM なしの真理を容認することを意味する。その場合、おそらく総合命題（偶然的命題）にだけ TM 理論は適用されるので、TMM と共に「真理は実在のうちに基盤を持つ」というテーゼを放棄することになる。このジレンマは 1.2 で述べた TM 論者が現在直面している問題と完全に一致する。後の分析で明らかになるが、こうした問題の原因は真理を対応だと理解することに起因している。実際整合説や真理の代替説に基づいた TM 理論では、このジレンマは生じないのである。TM 論者は基本的に真理を対応とみなしており、だからこそ否定存在命題や分析命題のような TM なしの真理が TM 理論に対する極めて重大な問題となる。

最後に E と p が同一でない場合を検討しよう。結論を言えば、この解釈は余計な存在者にコミットすることになると思われる。E と p を同一視しない解釈では、E は＜ *p* と p が対応していること＞という事態であり、この解釈ではこの事態が *p* に対する TM となる。無論ここでの p は＜雪が白いこと＞という事態に他ならない。したがって、E と p を同一視しない解釈では、＜雪が白いこと＞という事態の他に＜ *p* と p が対応していること＞という事態も要求し、さらに後者だけを TM だと考えることになる。だが *p* と適切に対応する p が存在するならば、＜ *p* と p が対応していること＞という事態は不要である。それゆえ、この事態は明らかに余剰な存在者であり、E と p を同一視する解釈の方が存在論的に経済的だと言える。

4.2　真理の整合説に基づいた TM 理論

整合説による真理分析の後件「*p* が信念体系全体と整合する」を、TM 関係の後件内の「P は真である」に代入すると次の式が得られる。

> TM 関係（2）：E が *p* に対する truthmaker であるのは、E が存在するとしたら *p* は信念体系全体と整合するが必然的であるときその時に限る。

上の E は信念体系全体と考えるのが妥当であろう。仮に E を信念体系全体と考えないと解釈するとしたら、おそらく E は＜ *p* と信念体系全体が整合すること＞という事態である。だが上の解釈を採用するとしても、この解釈は信念体系全体の存在を含んでいる。整合説では、*p* が真であるために必要なのは、*p* と整合的であるような信念体系全体である。そしてもし *p* と整合的であるような信念体系全体が存在するならば、＜ *p* と信念体系全体が整合すること＞という事態は不要である。確かにこの余剰な事態を TM として考えることは可能であるが、そのときには、＜「*p* と信念体系全体が整合すること」と信念体系全体が整合すること＞は TM になるかどうかを説明する必要があるだろう。この「山括弧で囲まれた事態と信念体系全体が整合すること」という事態は、いくらでも増やすことが可能である。余計な説明の手間を省くためにも、我々は存在論的に経済的な選択肢を取るべきである。

さて E を信念体系全体と考えるとき、TM 関係（2）は「E が *p* に対する truthmaker であるのは、

信念体系全体が存在するすべての可能世界で *p* と信念体系全体は整合するときそのときに限る」ことを意味する。ここでは信念体系が誰の信念体系であるかが問題であるが、個人と共同体どちらの信念体系と考えてもデメリットがあるように思われる。これについては以下で検討する。

TM 関係（2）の最も興味深い点は、TMM を容認しても否定存在命題や分析命題を扱える点である。その場合、すべての真理は個人ないし共同体の信念体系全体との整合性によって説明されることになるが、否定存在命題にせよ分析命題にせよこれらと信念体系の整合性を妨げるものは何もない。TM 関係（2）は一見問題ないように見えるが、もし E が共同体の信念体系だとすると、例えば個人の知覚判断の妥当性についてまで、わざわざ共同体の信念体系との整合性が要求されるのは奇異である。また E が個人の信念体系だとすると何を真とするのかが各個人で異なることになり、複数の同様に正しい TM 理論が存在することになる。このとき、TM 論者の間で何を TM とするのか一致できなくなるという問題が生じる。一連の問題は真理の整合説自体が抱える問題であるが、少なくとも否定存在命題や分析命題を扱える点は TM 関係（1）に勝る大きなメリットである。

TM 論者が手放しに喜べないのは、TM 関係（2）は「真理は実在のうちに基盤を持つ」というテーゼの放棄を迫るということである。TM 関係（2）は事態や事実といった存在者を必要とせず、信念体系の存在だけを要求する。端的に言って、TM 関係（2）における世界に存在する TM は信念体系ただ一つなのである。TM 論者は TM 理論のテーゼに基づいて TM を世界に存する実在の中に求めるが、TM 関係（2）の TM は明らかに実在には基づかない。それゆえ TM 関係（2）を受け入れるとしたら、TM 理論のテーゼを維持することは不可能である。結局 TM 論者はここで、TM 関係（2）を採用して結果的に上のテーゼを放棄するか、TM 関係（1）へと引き返し否定存在命題や分析命題の問題に再び取組むかのどちらかを選ばなければならなくなる。

4.3　真理の代替説に基づいた TM 理論

代替説による真理分析の後件「*p* がある十分良い理想的な認知条件のもとで正当化される」を、TM 関係の後件内の「P は真である」に代入すると次のようになる。

> TM 関係（3）：E が *p* に対する truthmaker であるのは、E が存在するとしたら *p* はある十分良い理想的な認知条件のもとで正当化されることが必然的であるときその時に限る

E はある十分理想的な認知条件と同一であると考えるべきだろう。それ以外の考えは TM 関係（2）と同様に、余剰な存在者を前提することになる。[18]E をある十分理想的な認知条件とすると、TM 関係（3）は「E が *p* に対する truthmaker であるのは、十分理想的な認知条件（E）が存在す

[18] 仮に E をある十分理想的な認知条件と考えないとしたら、E は＜*p* がある十分良い理想的な認知条件のもとで正当化されること＞という事態になるだろう。この考えは、ある十分良い理想的な認知条件の存在を含意している。代替説では *p* が真であるために、*p* が正当化されるような十分良い理想的な認知条件が必要である。このときもし *p* を正当化するような十分良い理想的な認知条件が存在するならば、＜*p* がある十分良い理想的な認知条件のもとで正当化されること＞という事態は余剰である。

るすべての可能世界で、*p* が正当化されるときその時に限る」となる。このとき TM 関係（3）も TM 関係（2）と同様に TMM を受容可能である。その場合、すべての真理は最終的にある十分理想的な認知条件のもとでの正当化によって説明される。しかし、分析命題は理想的な認知的な条件とは無関係に真理値を持つと思われる。[19] 分析命題のようなそれ自体で（その意味によって）真や偽になる命題にも現実の認知的条件を要求することは、分析的という概念自体に反している。分析性という概念が関係を持つのは意味であって、認知的な要素ではないからである。それゆえ、真理の代替説に基づいた TM 理論に対して分析命題は困難をもたらす。しかし TM 関係（3）は、TM 関係（2）と同様に否定存在命題を扱える点で、TM 関係（1）より優れている。

ただし TM 関係（3）が「真理は実在のうちに基盤を持つ」というテーゼを維持できるかどうかは議論の余地がある。TM 関係（3）は確かにある命題が理想的な認知条件のもとで正当化されるとき当の命題が真であることを認めるが、命題が表現するものが実在として存在するかどうかについては何も語らない。すなわち TM 関係（3）の採用は、特定の命題が真であることにはコミットするが、その命題が表現する形而上学的な事態やトロープの存在には一切コミットしないのである。また、TM 関係（2）における TM は信念体系ただ一つになるが、これと同様に、TM 関係（3）における TM も十分理想的な認知条件による正当化ただ一つになる。だが理想的な認知条件のもとでの正当化が、世界の中にある実在であるとは到底考えられない。それゆえ TM 関係（3）もまた TM 理論のテーゼを放棄すると思われる。

4.4　真理の多元主義に基づく TM 理論

真理の多元主義の特徴は、言説の領域に合わせて真理概念の説明を変えることである。この理論によれば、真理はある領域では対応であり、別の領域では整合によって説明される。極めてプラグマティックな見解であるが、TM 理論は総合命題にのみ適用可能だと考えている論者は、暗にこの多元主義を容認している。というのも、特定の真理論は特定の言説の領域にのみ妥当であると気づいたからこそ、TM 理論を特定の領域（総合命題）に制限したと言えるからである。そして今現在 TM 論者が抱える問題は、真理の対応説に基づいた TM 理論の限界を示している。

本章の分析で明らかになったように、どの真理の理論に基づいた TM 理論も特定の命題に対して何らかの問題を抱えている。それゆえ TM 理論の可能性を最も広げるのは、命題ごとに TM 理論に適用する真理の理論の使い分けが可能である理論だろう。これに合致するのは真理の多元主義だけである。ただし、真理の多元主義を採用するにしても、「真理は実在のうちに基盤を持つ」という TM 理論のテーゼは放棄せざるをえない。TM 関係（1）以外の TM 理論は、いずれも世界に存する実在ではない TM を用いるからである。それゆえ、古典的な真理の理論に基づいた TM 理論のみならず、真理の多元主義に基づいた TM 理論もまた、すべての TM 理論の問題を解消する解決策とはなりえない。

---

[19] ただしクワインの批判以来、「分析的」と「総合的」の間に区別を引くことは議論を要する問題である。

5. 真理の多元主義と TM 理論

前章では三つの古典的な真理の理論と真理の多元主義に基づいた TM 理論の検討を行ったが、その帰結は TM 論者に次のような重要な決断を迫る。もし TM 関係（1）を採用すると、否定の事実の存在を前提するか、TM 理論のテーゼを放棄するかというジレンマに陥る。他方で TM 関係（2）や TM 関係（3）や多元主義を採用すると、必然的に「真理が実在のうちに基盤を持つ」というテーゼの放棄を強いられる。したがって、TM 論者は否定の事実の存在を前提するか、TM 理論のテーゼを放棄するかのどちらかを選ぶ必要がある。

以下で私は、TM 論者に TM 理論のテーゼの放棄を提案する。その理由の一つは、1.2 でも述べた通り、TM 理論のテーゼは TM 理論にとって必ずしも不可欠な要素ではないからである。もしこのテーゼを維持するつもりならば、これが TM 理論にとって不可欠であるという証明が必要である。もう一つの理由は、テーゼを維持することよりも、否定存在命題や分析命題が扱えないことの問題の方が大きいからである。もし否定存在命題が扱えないとすると、全称命題も必然的に取り扱うことができなくなる。例えば「すべてのカラスは黒い」のような全称命題は「黒くないカラスは存在しない」といった否定存在命題を含んでいる。さらに「すべてのもの」を網羅するためには「これがすべてであり、これ以上はない」と言えなければならず、この点でも全称命題の理解には、「これ以上はない」という否定の命題の理解が要求される。このように、全称命題という論理形式の理解は否定存在命題の理解が不可欠である。

テーゼを放棄する路線に沿って TM 理論を検討するとき、最も妥当な真理の理論は多元主義だと思われる。なぜなら、TM 関係（2）と TM 関係（3）の問題は TM が一つだけになるという問題を持つからである。通常の TM 理論（TM 関係（1）に基づいた TM 理論）では一つの命題に対して複数の TM が存在しうると考えられている。[20] 例えば総合命題「少なくとも一人の人間が存在する」の TM は、人間であるすべての個体であり、それゆえすべての人間が原理的に TM になりうる。対して、TM 関係（2）や TM 関係（3）における真にするもの（TM）は、信念体系全体や十分良い理想的な認知条件であり、これらはどんな命題に対しても変わることはない。だが真にするものが一つだけであるという考えは、意味論の基本的な考えと馴染まない。というのも真理条件意味論であれ、他の意味論であれ、真理やその他の条件の充足の仕方は複数ありうると考えるからである。明らかに「一人の人間が存在する」という命題には、私やソクラテスの存在によって充足される、異なる真にするもの（真理条件の異なる充足の仕方）が存在するのである。だが、TM 関係（2）や TM 関係（3）では真にするものの差異は顧みられないため、命題ごとに真にするものが異なりうるという意味論における常識的な考えと齟齬をきたす。もちろん数学の領域など、理論全体との整合性が命題を真にするケースも確かに存在する。だがすべてのケースが数学の領域と同じ特性を持っているわけではなく、言説の領域の特性に合わせて真理概念の説明を使い分けることが肝要なのである。

それゆえ命題によって真にするものが異なりうることは、たとえ真理が必ずしも実在に基盤を

[20] Cf., Armstrong, 2004, p. 16.

持たないとしても TM 理論にとって重要な意味を持つ。それは意味論との調和という観点であり、この観点を維持することができるのは、言説の領域ごとに異なる真理の説明を与える真理の多元主義だけなのである。

（はらだじゅんぺい　哲学哲学史・博士後期課程）

――文献一覧――

Armstrong, D. M., 1997, *A World of States of Affairs*, Cambridge: Cambridge University Press.

――, 2004, *Truth and Truthmakers*, Cambridge: Cambridge University Press.

Cameron, Ross P, 2008, "How to Be a Truthmaker Maximalist", *Noûs* 42: 410-421.

Dodd, Julian, 2007, "Negative Truths and Truthmaker Principles", *Synthese* 156: 383-401.

Edwards, Douglas, 2011, "Simplifying Alethic Pluralism", *The Southern Journal of Philosophy* 49:28-48.

Lynch, Michael, 2009, *Truths as One and Many*, Oxford: Clarendon Press.

McGrath, Mathew, 2003, "What the Deflationist May Say about Truthmaking", *Philosophy and Phenomenological Research* 65: 666-688.

Mulligan, Kevin, Peter Simons, and Barry Smith, 1984, "Truth-makers". *Philosophy and Phenomenological Research* 44: 287-321.

Putnam, Hilary, 1981, *Reason, Truth and History*, Cambridge: Cambridge University Press.

――, 1990, *Realism with Human Face*, Cambridge, MA: Harvard University Press.

Rodriguez-pereyra, Gonzalo, 2006, "Truthmaker Maximalism defended", *Analysis* 66: 260-264.

Rowe, David, 2010, *Truthmaker Theory and Negative Truths*, VDM Verlag Dr. Müller Aktiengesellschaft & Co. KG.

Schaffer, Jonathan, 2010, "The Least Discerning and Most Promiscuous Truthmaker", *Philosophical Quarterly* 60:307-324.

Simmons, Keith, 2005, "Negatives, Numbers, and Necessity: Some Worries about Armstrong's Version of Truthmaking", *Australasian Journal of Philosophy* 83: 253-261.

Wright, Crispin, 1992, *Truth and Objectivity*, Cambridge, MA.: Harvard University Press.

The Impact of Theory of Truth on Truthmaker Theory

Junpei Harada

According to current analytic metaphysics, the truthmaker is that which makes the truthbearer true, and arguments about truthmaker are presented under the rubric of "truthmaker theory". In this paper, I will clarify the impact theory of truth on truthmaker theory in terms of the following three assertions:

1. Truthmaker theory is not a theory of truth.
2. Even if it were based on a theory of truth, truthmaker theory cannot simultaneously remain consistent with its central notation "truth is grounded in reality", and appropriately address negative existentials and synthetic truths.
3. If truthmaker theorists dismiss this notation, then alethic pluralism is the best replacement.

First I will demonstrate that truthmaker theory presupposes a theory of truth. Indeed it is surprising that many leading truthmaker theorists misunderstand this point. Thus I clarify this common misconception about truthmaker theory by underscoring the relationship between truthmaker theory and a theory of truth. When it becomes clear that truthmaker theory presupposes a theory of truth, questions about what kind of theory of truth truthmaker theorists accept, logically follow. In response to such questions, I will consider three classic theories of truth (correspondence, coherence, pragmatism) and one new theory (alethic pluralism). Given that each theory of truth is inevitably flawed, I will conclude that we are unable to solve all the problems. However, if truthmaker theorists decide to reject aforementioned central notation, this theory would benefit from adopting alethic pluralism in its stead because the many to many relationship between truthbearers and truthmakers can be maintained only on the basis of alethic pluralism. This line of thought is completely consistent with semantics. Thus, alethic pluralism is the best option for truthmaker theory.

「キーワード」
真理、真理の多元主義、truthmaker、真理の理論